

2020年11月14日  
年間第33主日  
菊地功大司教 メッセージ

わたしたちは、この世界を創造主である神からお預かりしています。

教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シ」には、次のように記されています。

「わたしたちが神にかたどって創造され大地への支配権を与えられたことが他の被造物への専横な抑圧的支配を正当化するとの見解は、断固退けられなければなりません(67)」

教皇はわたしたちが思い上がりの中で神に取って代わったかのように、この世界を自由気ままに酷使している現実を、あたかも当然の権利であるかのように振る舞っていることを批判した上で、人間は世界を「耕し守る」よう定められているとして、次のように続けます。

「耕すは培うこと、鋤くこと、働きかけることを、守るは世話し、保護し、見守り、保存することを意味します」

すなわち、与えられた賜物であるいのちを生きているわたしたちは、そのいのちが生きる場として世界を与えられているものの、それは勝手気ままに支配して良いと言うことではなく、責任を持った保護者として耕し守り保存する務めがあることを、繰り返し指摘されています。

その上で教皇は、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって、人間の生が成り立っている」と指摘し、「わたしたちがずうずうしくも神に取って代わり、造られた者としての限界を認めることを拒むことで、創造主と人類と全被造物界の間の調和が乱されました(66)」と指摘されます。

与えられた賜物は、自分自身が好き勝手に使って良いわけではなく、単に増やしたからそれでよしとされるわけでもなく、実は、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地と

のかかわり」という、この世界における人間の生を成り立たせている関係のなかで責任ある行動をとることによって、はじめて管理者としての務めを果たしたことになるというのです。

ですから福音において、五タラント預かった者は、外へ出て行って商売をする、すなわち人間関係の中でそのたまものを活用することによって、良い管理者であることを褒められるのです。逆に、一タラント預かった者は、それを地の中に隠しておくこと、すなわちだれとの関係をも拒否することで、管理者としての務めを果たしていないと非難されるのです。

今年の被造物を大切にす世界祈願日のメッセージに、教皇フランシスコは次のように記されていました。

「神は、大地とその住人が休息し、力を取り戻せるようにと、その英知をもって、安息日を設けてくださいました。しかし今日、わたしたちのライフスタイルは、地球に限界以上の無理をさせています。発展への飽くなき要求と、生産と消費の果てしない繰り返しが環境を疲弊させています」

その上で教皇は、「進行中のパンデミックは、何らかのかたちで、より簡素で持続可能なライフスタイルを取り戻すよう、わたしたちを促しています。この危機は、ある意味、新しい生き方を広げる機会を与えてくれました。地球を休ませると、どれだけ回復するかが分かりました。・・・余剰で破壊的な活動や意図に終止符を打ち、創造的な価値観、きずな、計画を生み出すために、この決定的な機会を有効に生かさなければなりません」

わたしたちは、まずいのちという最大のたまものを与えられました。そしてそのいのちが生きるためにこの世界を与えられ、管理するようにと託されました。わたしたちは、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわり」の中で、この預けられたたまものを十分に生かし、責任ある行動をとることで、いつの日か、「忠実な良い僕だ」と主から言っていただくように、努めたいと思います。